

の図書館」と「魔法の図書館 Plus」では利用者があまり重複していないという。

出版社が介在しないこのような出版コンテンツの登場は、デジタル時代における新しいコンテンツ流通のあり方を象徴するものであるが、特に「魔法の図書館」のケータイ小説は電子書籍の統計にはカウントされず、実態把握が困難な領域である。

4. 3 デバイスと電子書籍の流通

■携帯電話

電子書籍の流通については、携帯電話、PC、モバイル情報端末という主要な媒体がある。

携帯電話のコンテンツ配信に関しては携帯電話キャリアが公認する「公式サイト」があり、キャリアが定める基準にしたがってコンテンツの流通と課金が行われる仕組みとなっているこの公式サイトからの提供が、携帯電話向け電子書籍の主流である。携帯電話キャリアとしては、エヌ・ティ・ティ・ドコモ (DoCoMo)、KDDI (au)、ソフトバンクモバイル (SoftBank)、ウィルコム (WILLCOM)、イー・モバイル (EMOBILE) の 5 社が、総務省の認可を受けた事業者である。萩野によると、2008 年 12 月現在の電子書籍の公式サイト数は、600 サイト以上になっている。

■PC

PC 向けの電子書籍サイトについて正確な数字はない。『出版年鑑』(出版ニュース社) や『電子書籍ビジネス調査報告書』(インプレス R&D) では主要な電子書籍販売サイトのタイトル数をカウントしているが、ここには収録されていない電子書籍サイトと電子書籍群が多数存在することに留意すべきである。また、電子書籍を閲覧する方式としてこれまで主流であったダウンロード型だけでなく、インターネット技術の進展によってどこでも接続できる環境が徐々に浸透し、コンテンツをダウンロードせずにインターネットへの常時接続を前提とした非ダウンロード型(期限付き閲覧許諾など)の電子書籍の読書スタイルが出現した。コンテンツ配信側のサーバに自分の本棚をつくり、購入した電子書籍を納め、どこからでも ID/パスワードでアクセスすることが可能である。この場合、ダウンロードしないためコンテンツの不正コピー等を防止する DRM (Digital Rights Management) 対応の必要はない。

■読書専用端末

日本において導入された読書専用端末はこれまでのところすべて成功しなかったといつてよい。2004 年に「電子書籍元年」とまでいわれその普及が電子書籍にコンテンツを提供する出版社からも期待された「Σブック」「LIBRIe」はすでに生産を完了している。しかし、2007 年 11 月、米国・アマゾンが発売した「Kindle」は 3G データ通信機能を内蔵した点で

これまでの読書専用端末と異なっており、PCを介することなく欲しい本をダウンロードできるように注目を集めている。しかも提供されるコンテンツは発売当初で9万タイトル、発売から約1年で19.5万タイトルになっており、しかもニューヨークタイムズで紹介するベストセラーの90%が確保されているという。ただ日本での発売時期は現時点では未定である。

■モバイル情報端末

モバイル情報端末とは、iPhoneのようなスマートフォンやニンテンドーDS、PSP（プレイステーション・ポータブル）などの携帯型ゲーム機を指し、これらの読書専用端末ではない汎用型の機器を使って電子書籍を読むことができる。そして、もっとも積極的に電子書籍コンテンツ供給に関わっているのは大手コミック出版社である。

4. 4 増加する電子書籍の利用

■個人利用

電子書籍の個人利用の悉皆的なデータはない。『電子書籍ビジネス調査報告書 2008』では、「ケータイを用いてインターネットを行っている11歳以上の個人」を対象に「ケータイ電子書籍」について調査を行っている。（2008年6月13日～7月2日調査、利用率調査11,632サンプル、利用者実態調査1,172サンプル）

この調査によると、ケータイ電子書籍の認知度は91.9%に達し、ケータイ電子書籍の利用率は29.6%（2007年調査では21.7%）、有料コンテンツ購入は7.9%（同3.9%）であり、有料コンテンツ購入が伸びていることが分かる。また利用率では女性の10代で5割、20代で4割強、購入率は30代女性を中心に高い。購読されている電子書籍のジャンルは「コミック・マンガ」75.8%、「小説やライトノベル、ノンフィクションなどのテキスト系読み物」41.0%となっている。電子書籍に対する不満点や要望では、携帯電話端末や通信環境といった技術的な面への不満が上位を占め、「タイトル数が少ない」といったコンテンツやサービスに対する不満も多いことが分かる。（『電子書籍ビジネス調査報告書 2008』インプレス R&D、2008、p.192）

毎日新聞社の「第61回読書世論調査」（2007年6月調査）によると、「ケータイ小説」を実際に読んだ媒体について10代後半女性では「携帯電話」51%、「書籍」49%と、本ではなく携帯電話で読む人の方が多いという逆転現象が起こっている。

毎日新聞社と全国学校図書館協議会の「第54回学校読書調査」（2008年6月調査）では、「ケータイ小説」を実際に読んだ媒体について、「携帯電話」が小学生5%、中学生8%、高校生33%であるのに対して、「出版された本」が小学生10%、中学生28%、高校生13%、と高校生になると本よりも携帯電話で読む比率が高まってきていることが明らかになった。